

花鳥諷詠論（Ⅲ）

山口青邨

昭和二十七年玉藻二月號に虚子は花鳥諷詠といふ小文を載せてゐる。この頃の人にその精神を教へようとして執筆したものである、その中にこんな風に要約した言葉が幾つか書いてある。

「俳句は季題が生命である、少くとも生命のなかばは季題である。季題といふものを除いては俳句はあり得ない、それは俳句ではない、ただの詩になる、詩としては成り立つが俳句としては成り立たない。」

「俳句は季題（花鳥）といふものを、切離すことの出来ない文藝である。俳句は自然（花鳥）を詠ひ、又、自然（花鳥）を透して生活を詠ひ、又自然（花鳥）によって志を詠ふ文藝である。」

「総じて自然現象（花鳥）はわれわれの生活にゆとりを與へる、それで苦しい極み、貧しい極み、生活を否定しようとするやうな場合、天然現象（花鳥）に心を留めると忽ちゆとりが出来る、少くとも諷詠しようとする人の心にはゆとりが出来る。」

「俳句は超越な文學ではない、それは先天的に極まった性質である、それは季題といふ物があるからである俳句は先天的性質に適した文藝である。」

「自然（花鳥）と共にある人生、四時の運行（季題）と共にある人生、ゆとりのある人生、悠々たる人生、それらを詠ふのに適したのがわが俳句の使命である。」

「花鳥（自然）諷詠といふことは俳句それ自身の謂である、これは俳句未生以前本来の面目である。」

これ等は今日、虚子の抱いてゐる確信である。

私はここには自分の考はつけ加へないことにする。

（参考書 高濱虚子著 俳句讀本 日本評論社版）